その後のこと

平島　尚典（４組）

下の新聞は、私達が入学した時のことを報じる玉龍新聞です。
僕もこの三百六拾名の一人として入学しました。そして、たまたま新入生代表として宣誓までしたのでした。しかし、卒業はできず、父の転勤のため、翌年一月には大分県中津南高校へ転校しました。

中津南へは二週間通学したのみでした。病気再発のため休学、四年後退学。父の転職のため熊本へ移転しました。そこで通信制高校へ入学し、療養しながら勉強しました。

卒業したのは一九六三年でした。その後も療養生活は続きました。三十代になって小康を得て、司法書士となりました。

●司法書士事務所開設（一九七二年）

「炎天下　看板わが名が　眩し白し」

俳句は療養中に覚えました。（「萬緑」同人）司法書士は定年がなく、現在は自宅に看板を掲げています。

「再会あたたか　外本降りと　なりてゐつ」

一九七四年、坂井邦雄君と東京駅で十九年ぶりに会いました。

●旧友草野大悟急逝（一九九一年）

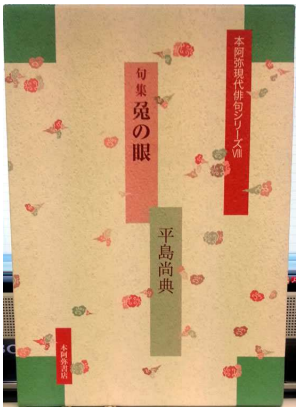
「二月尽　あの口髭が　もう語らず」

草野君とは長田中の時、同じ下竜尾町でしたので、地域の寄合の時一緒でした。また玉龍では、養護室の仲間でした。

僕の普通の高校生活は、玉龍在学時の九ヶ月だけです。新聞部に属していました。人生の終わりが迫りくる時、ここにまた仲間に加えて頂き、感謝しています。

近詠七句

祖母もまた　よそゆき顔や　七五三
ヒト群を　見る猿の群　山笑ふ
海女語る　瑕のあるのが　真珠です
ドッコイショと　腰下したり　鰯雲
百歳の　嫗聴き役残る　虫
路上にて　二胡の合奏　十二月
ちりめんじゃこの　黒目の数や　同窓会



THE GY KURYU　1955年4月9日

玉龍新聞

鹿児島県玉竜高等学校
鹿児島市池之上町48
（TEL・1365）
編集兼発行
玉竜新聞委員会編集部

印刷所　南日本新聞社

きょう高校生活への第一歩

新講堂第一回の入学式

本四月九日、本年度新入生三百六十名の入学式は、木の香新しい講堂で行われる。玉竜となってすでに五年、いま六年目の歩みを進める日、ここにまた新たな同志を迎えて明日への道をともに力強く伸びて行こうとする。

本年度本校入学式は、明朝の部に続いて池畑校長から三百六十名の入学許可がきょう午前十時から講堂で挙行される。

学校長の式辞が終ると、新入生代表亜島尚典君の力強い宣誓があり在校生総代として生徒会長⑧竹下修君の祝辞、PTA会長岩崎貞氏の祝辞、父兄代表の挨拶が行われる。ホーム担任の紹介で式閉じられる。

忘れられない感激に包まれて、高校生活三年の第一日目は踏み出されたのだ。玉竜山の緑の中には点々と桜が匂い、白い校舎は"若さ"を象徴している。

ここは青雲の希望を持つ学舎であると共に、厳の試煉にうち耐えて行かねばならない道場でもある。

式後、新入生は各自の教室に移って、本校生徒としての諸注意を示し、ホーム担任から受ける。父兄には引続き講堂で、在学中の諸事情についての説明が行われる。なお二・三年生との対面式は明後十一日行われることになっている。

晴れの360名

新入生は、三月二十三日実施された入学学力検査と、出身中からの内申書によって五百十七名の内から選ばれたものである。

異った新しい高校教育への第一歩を始める。

新入生三百六十名は、新しい白線帽や、またセーラー服の姿に喜びを胸一杯に包んで、九ケ年の義務教育とは異った新しい高校教育への第一歩を始める。

心の糧

○巨匠とはあらゆる人びとの目を持って熟視
○農業は水道にその
○低きところよりきた
○弱者の中での弱者が
唯一の道一芸術。
○学を為すに三要あり

中學區

県教委では県下公立高校普通科課程の通学区域について三月二十八日協議した結果、昭和二十四年末

玉竜高等学校校歌

校歌

一　南の空晴れわたり
黒潮のたゆたふところ
火の島の噴煙けば
くろがねの意気は燃えたつ
ああ発剌の若き玉竜

二　鉄道の走るふもつ
雨を呼び風をはらみて
舞ひのぼる雲を仰げば
天を衝く力みなぎる
ああ躍進の若き玉竜

三　荒きよくの試煉に耐へて
うちたつる文化のあした
旭日の光仰げば
青雲の希望はゆる
ああ玲瓏の若き玉竜

作詞 長田重行　作曲 前山義治